



「オタク論」と系譜学

王, 劣瀟

(Citation)

社会学雑誌, 31/32:88-102

(Issue Date)

2016-10-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041379>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041379>



「オタク論」と系譜学

王 芳 瀟

神戸大学大学院人文科学研究科博士課程

この論文では、筆者がミシェル・フーコーの考古学及び系譜学の方法を参照し、権力関係及びアイデンティティの視点から「オタク」という概念がどのように構築されるか、どのように変容されるかを考察したい。特に書籍として出版された「オタク論」及び多数の新聞記事を分析することにより、時間の流れとともに、オタクという言葉の意味及び機能が変化していくことを明らかにする。その原因を突き止めるために、そしてその過程を明らかにするために、フーコーの枠組みが必要になってくる。

一言で言えば、この論文はフーコーが人文科学そのものに対して行った考古学及び系譜学的な考察を、オタク研究という極めて限定的な範疇の中に応用したものである。フーコーの知見が現在進行中の社会現象の分析に有効であることを示し、そして、オタクの問題が「哲学的人間学」の系譜に繋がっていることを示すこと、それが筆者の目的である。

一 はじめに

「オタク」という言葉は元々、三〇年ほど前の一つの社会現象を示す言葉であったが、今でも良く使われている。性的犯罪者の予備軍として断罪されたり、エリート消費者として持ち上げられたり、大変盛り上がりを見せていた言葉である。だが、オタクに関する言説が多様に存在している。それ故、「オタクとは何か」という問題は常に論争を

呼び起こしている。これはイマヌエル・カントが提起した「人間とは何か」という問題と良く似た状況にある。もとより、オタクは人間（の一部）である。そこで、オタクをめぐるとこの論争を「人間学」の系譜、即ちカント哲学をはじめとする「成熟」と「近代」の概念を扱う哲学の系譜の中で検討したらどうであろう、と筆者が提案したい。これがオタク研究の一つの新しい可能性を示すと考えられる。哲学の分野では、その系譜に沿って一番遠くまで辿り着

いた人は、恐らくミシエル・フーコーである。筆者はこの論文で、フーコーの理論を応用した「オタク論」を実践してみたいと思う。

二 方法

二一 考古学と系譜学

フーコーは「知の考古学」として知られている。その研究対象は人文科学の歴史及びその前提となるエピステーメー(知の枠組み)であり、その研究方法は「考古学」である。それは主に三つの概念によって行われる。まず、「行為によって実際に語られたもの」を意味する「言表(エノンセ)」という下位概念があり、それが「言表の全体的まとまり」としての「言説(ディスクール)」を構成する。そして更に、「事件としての言表の不可視の総体」を意味する「アルシージュ」という上位概念が「言説」によって構成される。この具体的な手法は「言説分析」と呼ばれている。だが、後期のフーコーは、考古学という方法だけでは物足りないと考えていた。言説は、単なる言表の集合ではない。一つの言説の内部で可能であったはずの言表が実際に語られなかったこともある。つまり、言説とは、語られた言表と語られなかった言表の差異を意味するものである。実のところ、言説の領域からの言表の排除の構図を考察するの

もフーコーの重要な仕事であった。今の歴史が可能であったはずの様々な言説の一つのバリエーションにすぎないのであれば、実際に語られた言表だけではなく、語られなかった言表の存在論的な意味とそれらが排除された理由を考察することもまた重要である。だが考古学という枠組みでは、現在のエピステーメーを分析することも、語られなかった言説を分析することも、それが語られなかった理由を説明することもできない。この要請から、後期のフーコーの分析では、非言語的なもの(芸術、政治、日常生活などの領域)が中心に置かれている。その新しい方向性を、ニージェの著作にちなんで、フーコーが「系譜学」と名付けた。それが形而上学と伝統の歴史学との差異は、起源や超越論的主観(主体)などの観念を拒否するところにある。系譜学は、真理が有する権威への懐疑として現れ出る反本質主義として規定され、歴史的過程に内在しており、利害関心に関わっているものである。一言で言えば、考古学から系譜学への方向転換は、構造の分析から権力の分析への移行と言えよう。この移行に伴い、「エピステーメー」という概念が「アルシージュ」や「装置」などの概念に取って代わられ、廃止されるようになった。だが、これは実際に語られた言説を分析するのが重要でないこと、または考古学の方法が否定されたことを意味しない。一方、系譜学は考古学の外部拡張であり、それとは相補的な方法である。もう一方、

系譜学が考古学に進化をもたらすものでもある。フーコーが言ったように、「その分析は考古学的な次元を持つので、この問題構成の諸形式そのものの分析が可能となり、系譜学的な次元を持つので、実践とその変容をもとにそれら諸形式の形成の分析が可能となる」（フーコー、一九八六b:一九）。つまり、フーコーの考えた考古学と系譜学の両方の形式を分析の方法として同時に用いることは可能である。補足説明しなければならないのは、人間を行為主体として見なさないという立場から、特定の戦略を採用し、特定の目的を果たそうとする人間の目的意識をどう扱うことができるのかという問題である。フーコーが権力を「特定の社会において錯綜した戦略的状况に与えられる名称」（フーコー、一九八六a:一二〇—一二二）と規定し、「人間は欲望によって主体として自己を構築する」という立場を取ったので、特定の行為の目的は問題にはならない。同じ目的を持つ人々が、同じ戦略を採用するとは限らない。逆に、同じ戦略を採用する人々が、同じ目的を持ついても限らない。フーコーは戦略分析のみを重視し、「意図しなかった帰結」などの問題については殆ど言及しなかった。戦略はあくまで事後的に見出されたもので、それが目的に合致しているかどうかは、権力分析の視点から見ればそれほど重要なことではないと考えられる。

二二 具体的方法

では本研究の具体的な手法を説明しよう。まずは、フーコーの系譜学的な視点、つまり権力を「一定の社会において錯綜した戦略状况に与えられるもの」として見なす視点に言説分析の「基礎」としての位置を与える。

次に、時間軸の上に境界線を画定し、いくつかの時代に分けて、そして「オタク論」全般をそれぞれが所属している時代に置き直す。フーコーは『言葉と物—人文科学の考古学』で中世とルネサンスのエピステマー、古典主義時代のエピステマーと近代のエピステマーという時代区分をし、人類の知の枠組みに大きな断絶が存在すると主張した。それと同じように、オタク論の歴史にもやはり断絶が存在している。そして勿論、単に断絶があるということだけではなく、その背後にある権力関係を分析する必要がある。

では、それらの「断絶」がどこにあるのかを示そう。まずは、一九八三年六月を時間軸の起点として規定しよう。ただしそれより前に第一回「コミックマーケット」が行われた一九七五年の前には、「オタク」の三つ目の意味が既に存在したと思われる。だが、その第三の使われ方を定着させたのは『漫画ブリッコ』の一九八三年六月号に掲載されたエッセイ（「おたく」の研究）である。よって、その前の出来事をオタクの「有史以前」の出来事として見なし、

本論文では扱わないこととした。

次は一九八九年七月二三日、東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件の犯人、宮崎勤が逮捕された日である。彼がオタクとして断罪されたことは、オタクの史上最大の出来事の一つとして数えられている。

続いて、一九九六年五月二五日を次なる境界線としよう。当時、東京大学のゼミで「オタク文化論」を教えていた岡田斗司夫がゼミのテキストである新著『オタク学入門』を、発売と同時にインターネット上で全文公開した。これは、オタク論の方向性が完全に変わったことを象徴する重大な出来事であった。

更に、二〇〇四年一〇月二二日という日も一つの境界線に相応しい。とあるアキバ系オタク青年の純愛物語『電車男』が出版された日である。この事実に基づいた物語はついに世間で話題を得て、爆発的なブームとなっていた。その効果により、オタクという言葉の知名度が急速に上がり、やがてオタクをめぐる戦略に大きな影響を与えた。

この論文で筆者が想定する最後の境界線、それは多分二〇〇八年四月一五日である。オタク評論の第一人者岡田が、『オタクはすでに死んでいる』という著書を出版した日であった。ただしその内容はほぼ二年前（二〇〇六年五月二四日）に、新宿ロフトプラスワンで行われたワンマントークショーでは既に公表されていた。いずれにせよ、そ

こに断絶が存在することによって変わりがないと考えられる。

それらの境界線を画定することは、一体どのような意味があるのか。それは「オタク論」全般をそれぞれが所属している時代に置き直すためである。それぞれの時代のオタクのイメージを具象化し、いくつかの「オタク像」、即ちオタク論の「装置」を構築するためである。この論文で以下に示すように、基本的にオタクに関する言説は互いに矛盾している。オタク論の歴史に断絶が存在するからである。まずそのことを明らかにする必要がある。

基本的に、社会の中で影響力を持っている典型的な「オタク像」は四つ存在している。だが、境界線が五つ存在しているのなら、「オタク像」は六つも存在しなければならぬ。筆者は一九八三年以前の状況を有史以前としたが、それを除いても、まだ一つ残っている。いわゆる「現在」である。だが、「考古学」は現在を分析することができない。フーコーが現代のエピステーメーについては殆ど何も言わなかったのもこのためである。ここからは系譜学のみに属する領域であり、前述した「例外的場合」である。

次章では、それぞれのオタク像を詳しく紹介したい。

だが、筆者の方法に対しては次のような異論も考えられる。六〇年代生まれを第一世代とする、いわゆる世代別のオタク論が存在する。他に、行動パターンを基準にする分類法も存在する（野村総研など）。それらと比べれば、筆者は様々

な要素を無視しているのみならず、新しい可能性と言いな
がらも、古い方法を繰り返しているだけではないか。

念のために強調するが、筆者のオタク研究はそれらとは
根本的に異なっている。何故かと言えば、それらのオタク
論は基本的に一種の立論である。言葉を厳密に定義するの
は不可能であると哲学者ルトヴィヒ・ウイトゲンシュタ
インが言った。そのため、既に存在した断絶を乗り越える
ため、複数の下位概念を作り、「オタク」という言葉を広
義化し、家族的な類似性を構築するしかない。だが、その
ような手段は、必ず「否定神学化」という現象を引き起こす。
つまり、特定のオタク論を否定することにより、「オタク」
という言葉の背後には本質（理念）が存在することを肯定
してしまう。その問題を回避できる手法として一番相応し
いのは、フーコーの方法であるように思える。それは立論
でも駁論でもない。オタクに関する言説のあり方及びそれ
らを可能にしている前提を明らかにすること、それがフー
コーの構築主義的な手法に基づく筆者のオタク研究の方法
である。

二二三 言説の選択

実践の段階に移行する前に、もう一つ答えなければなら
ない質問がある。それはこの論文で取り上げられる言説に
関することである。この論文では、主にどの形式の言説を

扱うのか。選択の基準とは何か。確かに、オタクに関する
言説を全て一つの論文の中で扱うことができない以上、筆
者による選択が重要であるように思われる。

まずは最初の質問から答えよう。言説の形式としては、
やはり「再帰性」の強いものに注目したい。即ち、個人が
自らの行為に関する情報を、その行為の根拠について検討、
評価し直すための材料として活用することである。アイデ
ンティティの構成や利害関心の分析を重視する系譜学の枠
組みにとっては好都合なものである。

再帰性という観点からは、出版物としての文献を取り上
げることが最も適していると考えられる。言説が再帰性を
発揮するには、常に確認できなければならない、そして手
軽に扱えなければならないからである。その中で、筆者が
特に重要視しているのは、書籍と新聞の二つの形式である。
それらに対して雑誌、TV番組、トークショーなどのマル
チメディアコンテンツは、その時効性及び扱い難さから、
ここでは取り上げないようにしたい。

しかし、選択の基準は問題である。書籍については、こ
れといった基準は存在しない。何故ならオタクに関する書
籍の数は限られているので、別に選択を行う必要もないよ
うに思える。だが新聞はそうとはいかない。質を重視する
言説分析はランダムに対象選択することはできない。では
どうすれば良いのか。

まずは「三大紙」の新聞記事データベースで検索してみよう。タイトルと内容両方で「オタク」というキーワードを含む記事を検索した結果、朝日新聞は一七〇〇件、読売新聞が九九八件、そして毎日新聞は八八四件である（二〇一二年一〇月一九日まで）。この論文で全ての新聞を取り上げるには紙幅が足りないのです、該当件数の多さからまず朝日新聞を選びたい。

次は選択の方法だが、客観的な基準を想定することはできない。「相手の住居」という意味で使われるものもあれば、他の言葉の一部として現れるもの（「オタクサ」など）もある。更に、同じ記事が何度も検索されることもある。そのような場合を機械的に排除することは難しい。結局、筆者が全ての記事の内容をチェックし、独断で判断するしかない。その結果、一七〇〇件の中から一五七件の記事を有効記事として選び出した。記事内容を全て合わせると約三〇万文字になるので、細かい部分にまで立ち入ることはできないが、時代ごとにまとめて簡単に紹介することとする。では本論を始めよう。

三 オタクの系譜学

三―「根暗的なオタク」の時代

社会学者宮台真司によれば、八〇年代では、関係者や研究者を除いて、「オタク」という言葉を知っている人は殆どいなかったという。つまりその時代には、「オタク論」やオタクに関する記事が殆ど存在していなかった。宮台は社会学者として、当時の若者に関する社会調査に関わっていたので、この第三節で一番重要に思われる内容は宮台の「オタク論」に他ならない。

まずは宮台自身による「新人類」と「オタク」の説明を紹介する。「新人類」とは、「オシャレな記号的消費行動と対人関係とを結合した若者たちを指す言葉」である。同じ時代に生まれた「新人類」と「オタク」は、「二つとも同時代の若い世代に向けて適用されたものである」（宮台、一九九四・一五三―一五四）。宮台の分析では、最初から「新人類・原オタク文化」という一つの原文化が存在していたが、それが後に新人類とオタクという二つの分岐を見せたのである。その分岐の原因は、「新人类的な記号的消費の価値は社会・コミュニティの中でしか体现されない。それが対人関係が不得意な連中にとつての高い敷居になったということである」（宮台、一九九四・一六六―一六九）。オタクが「消費社会に取り残された存在」という意味である。

それから、宮台は更に調査を実施し、そしてデータを解釈するために予期理論をその人格システム理論とを結合させて新しい理論を作り出した。「期待はずれが生じた時に、いかに自己イメージを維持するか」という戦略のパターンを論理的に考え、そして考えられたモデルと合致するように因子分析とクラスター分析を組み合わせることにによって、人格システムの類型を抽出する方法を宮台は用いている。その結果は、ミーハー自信家、頭の良いニヒリスト、バンカラ風さわやか人間、根暗的ラガード、友人寄りかかき人間、の五つに分類されている。新人類の特徴はその独特の記号的消費生活ぶりであるから、そうした振る舞いが見出される「ミーハー自信家」と「友人寄りかかき人間」がそれぞれ新人類のリーダーとフォロワーで、そしてオタクに該当するのは「根暗的ラガード」である。

宮台の結論はこうである。「人格システムという抽象水準で見るなら、新人類が記号的消費にふけるのは、時代的な文脈を背景にした一種の偶有性であって、彼らにとって本質的なことではない可能性が出てくる」(宮台、一九九四・一八二)。言い換えると、「行為類型が時代的な文脈で異なっても、それは人格類型の差異を意味しない」(宮台、一九九四・一八四)。その結論を用いて、根暗的ラガードの一部がオタク化した理由を宮台はこう説明する。その他の四つの人格類型システムはどれも特定の戦略で複雑性

を処理し、世界を有意味化できるが、根暗的ラガードだけが世界の無意味さに直面せざるを得ない。それ故、根暗的ラガードにおいて、自分はオタクだとする自己意識が他より圧倒的に高いことも、根暗的ラガードの一部が異世界を夢想するツールとして、メディアから与えられた世界に耽溺することもある意味で自然なことだと理解できよう(宮台、一九九四・一八五―一八八)。また、オタクが差別される理由も説明されている。実際、差別の対象になったのはマニア的行為類型の異質性それ自体ではなく、ある時期からそうした行為類型が専一的になったかに見える、ある種の人格類型が差別されたのである。こうして一旦ある種の人格類型が差別の対象になると、今度はそれまではどうでもよかった様々な振る舞いまでもが当の人格類型に事後的に帰属されて「オタクキー」という烙印を刻きされることになった(宮台、一九九四・一九一―一九二)。

宮台の理論は正論であったが、問題点も存在する。まず、宮台は「人格類型と行為類型が重なる」という可変的な表現を使っていたが、「その人格類型こそがオタクの本質である」と安易に解釈される危険性がある。もう一つ、それが二〇年前の状況であって、今は既に状況が変わっている。それが可変なものである以上、その結論がいつまでも有効なものではない。したがって、何故それが有効でなくなったのかを考察する必要がある。

三―「変態的なオタク」の時代

この時代の主役は、東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件の犯人、宮崎勤である。だが、ここで一つの疑問が浮かんでくる。この事件はあくまで偶発的な出来事である。何故それがオタクをめぐる権力と戦略の流れを大きく変更させることができるのか。この点に関しては「オタクの街」として知られる秋葉原の研究者、森川嘉一郎の説明を紹介しておきたい。

森川によると、オタク市場の規模の小ささとコントロールの難しさが大企業メディアにおけるオタクの差別的な扱いの主な原因である。メディアにおけるオタクバッシングは誘拐殺人事件に起因しているが、「仮にそうしたメディアのスポンサーたる大企業の多くがオタク相手に大儲けをしてたとするならば、類似した事件が何度起ころうと、メディアはオタクを文化的リーダーとして持ち上げ続けるに違いない」（森川、二〇〇三、三五）。だがそれだけではなく、森川はアニメコンテンツの特徴から、そのファン層（オタク）という消費者集団がマス・マーケティングの戦略とは相容れない関係にあると断言した。森川によると、アニメコンテンツは熱狂的な一部ファンの共感感情を呼ぶものであり、マス・マーケティングには乗らない。大量消費社会の商品としては、一種の敵となる。こういったものが売れては困るわけである。マス・マーケターの敵殲滅の欲望

は、マス・マーケターが大資本の側にあることから、簡単に権力と結び付く。まず宮崎をオタクだと決め付けて、そしてオタクのイメージを全て否定した。それがマス・メディアのやり方であった。それに、秋葉原のような東京の一等地を、あのような貧乏くさく、お坊ちゃまの教育上良くない「ワイセツ物」をちまちま売って、たいした儲けにならないような街にしておく、一番損するのが東京都に他ならない。このように、森川はオタクを貶める言説の実践を可能にする条件を考察していた。その意味で、フーコーの方法と良く似ていると言える。

次は、宮崎について言及した他の論者による「オタク論」を挙げておく。中島梓の『コミュニケーション不全症候群』である。中島はまず「オタク」という言葉に込められた意味から説明した。コミックマーケットに参加していた青少年が互いに「オタク」という二人称で呼び合ったのは、「個人的関係をまず相手に対して暗黙の内に拒否しているからである」。そのような現象は現代日本社会全般を覆っている一つの病気、つまり「コミュニケーション不全症候群」の表現であると中島が主張した。それは他の存在への想像力の欠如、周囲にいる人間を人間として認識できない状態なのである（例えば満員電車の中）。何故そのような事態になったのかと言えば、現代都市社会では、人間は生物学的限度を越えた密集を強いられた環境の中で生きなくては

ならないからである。そこで、人間が自分の心を防衛するために、自分の「縄張り」を侵す者を同類と見なさないことでその不快感を軽減させる。それが人間ではなく、社会の病的な状態であると中島が述べた。このような社会に適応するには、やがて病的な適応手段を取らざるを得なくなる。これが中島の「オタク論」の基盤である。「要するに彼らの精神構造が、蝸牛的であることを示しているのである。まさしくその蝸牛の殻の中から他の蝸牛に呼びかける二人称としては、家から家へのオタクであるというのは、極めて正しい正確な選択に他ならなかったわけである」(中島、一九九五・四九―五〇)。

重要なことは、「病的」と言いつつも、中島は「オタクは一応現実の規範には適応している」と評し、それを分裂症や神経症の患者から区別している。中島は宮崎を「現代に適応しようとするありとあらゆる試みの中でさえ、最低限度の規範への適応を欠落していたのである」と評していた。つまり、宮崎はオタクに相応しくないと中島が判断したのである。批判するどころか、中島はオタクを擁護していたとさえ言える。この著書が出版された時期を考えると、それが時代の流れに反するものであったことは明らかである。

それだけではない。この時期の朝日新聞の記事を検索すると、驚くべき事実直面することになる。その時代にあつ

て、オタクを批判する記事が全く見当たらないどころか、逆にオタクを擁護する記事が良く見られることである。「おたく」で検索しても、やはり批判の記事はあまり見当たらない。オタクにとっては最悪の時代であったはずなのに、「変態的なオタク像」に関する描写は全く足りない。それが偶然なのか、それともメディアの種類による差異なのか。これは今後の課題に繋がっているが、ここではもう少しだけ、側面的な証拠が必要となる。

『おたく』の精神史―一九八〇年代論』の著者、大塚英志が宮崎について言及したのを確認できる。基本的に大塚は、宮崎がオタク(おたく)であるかどうかについてはつきりした判断を下さなかった。だが、当時のマスコミの態度が気に入らなかったため、敢えて宮崎を擁護する立場を取っていたと大塚は書いている。やはり、その時代のマスコミに、オタクに対する悪意を感じ取っていたのであろう。例えば、宮崎が逮捕された後、カメラマンがその部屋を撮影する時、その部屋の内部がカメラマンによって配置し直された可能性がある(大塚、二〇〇四・七五―七六)。そこには偏向報道という悪意が存在した、と大塚は述べている。他に、「岡田斗司夫単発原稿一覧」というサイトでは、岡田によるこの事件についてのコメントを確認することができる。岡田は以下のように述べていた。「オタク族という新人類は、八〇年代のバブル経済・サブカルチャー全盛

時代に、一般人には全く理解されず、いつまでもマンガやアニメを見ている子供っぽいヤツ、ダサくてダメなヤツというレッテルが貼られる。それに追い打ちをかけるように一九八九年、連続少女殺人事件が発生、マスコミの容疑者M「オタク」社会不適格者という偏向的な報道によって、人々の間にオタクはダサくてダメなヤツだけではなく、暗くてアブないヤツ、という決定的な差別感を植え付けることになった⁽⁵⁾。そして、著書『オタクは既に死んでいる』では、いくつかの例が挙げられている。例えば『噂の真相』、『週刊プレイボーイ』、『SAPIO』、『スコラ』などの雑誌がそうである。だが新聞というメディア（少なくとも朝日新聞）では、そのような傾向があまり見られない。

念のために補足すると、大塚は「オタク」という表記を避忌し、平仮名表記を使っていた。大塚によると、文部科学省や経済産業省がオタク文化を「国家に公認され現代美術」そして「国の誇り」として仕立て上げようとした。だから「見せしめ的な有罪判決」が出た「おたく」という用語を黒歴史として葬り去り、片仮名に書き換えようという戦略を立てた⁽⁶⁾。この証言から、オタクの歴史に大きな断絶と権力関係の変化が読み取られる。その変化が新しい言説の形態を可能にしていた。

三―三 「貴族的なオタク」の時代

なるほど、オタクに対する権力戦略が変わった。「おたく」と「オタク」の差異が構築され、岡田はそれを利用し、後に、この時点で「作戦を展開した」ことをはっきりと認めている（岡田自身がそれを「洗脳」と呼ぶ）。それは「マスコミの姿勢の変化」と、海外でオタクが「個性的でクールな趣味」とされていることを利用し、オタクのイメージを改善させる作戦であった（岡田、二〇〇八・五八）。これ以上に読みやすい戦略はない。

『オタク学入門』では、岡田がオタクを「映像の時代に過剰適応した視力と、ジャンルをクロスする高性能なレファレンス能力で、作り手の暗号を一つ残らず読み取ろうとする、飽くなき向上心と自己顕示欲を持つ貪欲な鑑賞者」と定義した。そのような鑑賞者のあり方及びビジュアル芸術に関する内容が『オタク学入門』の大半を占めていた。だが、「おたく」に関する内容には全く言及されていない。岡田は「おたく」と「オタク」を意図的に混淆させたことにより、「幽霊的な効果」を生み出そうとしていた。それを「幽霊」や「散種」など、哲学者ジャック・デリダの概念を駆使して分析することができる。

勿論それだけではない。岡田はその定義から、オタクこそが情報資本社会をリードする情報強者であるという結論を導き出した。「何故オタクは良い年して子供番組を見て

いるのか」という質問に、オタクは「精神年齢が低い」のではなく「早熟で知的な存在」であるから、「あてがわれた文化を追いかける消費者としての若者層に入りきれず、今までマージャー達も分析できなかった」と岡田は答えている。つまりオタクは、「あんなマスコミが作ったような流行に踊らされるのはバカだと決め付けている」のである（岡田、一九九六・五五―五九）。宮台の理論とは逆に、岡田はここでオタクの「精神の貴族」としての特徴を強調していた。それによって、オタク的な「デイスタンクシオン」を発見し、「マスコミが作ったような流行に踊らされるバカ」を差別することによってオタクの新しいアイデンティティを構築した。この事件は権力戦略が既に変わった証拠でありながら、新しい変化を引き起こすきっかけにもなっている。

岡田の影響か、それとも時代の流れか、この時代には、オタク論者が多数現われた。その中で最も重要な論者は、既に紹介した森川と大塚以外に、東浩紀と斎藤環がいる。実は、東の著書『動物化するポストモダン―オタクから見た日本社会』はこの論文の冒頭で取り上げた「人間とは何か」という哲学問題を扱う著作なので、論文の最後で紹介したいと思う。まずは斎藤の理論から紹介しよう。

斎藤は精神科医であり、ジャック・ラカンの研究者である。『戦闘美少女の精神分析』はタイトル通り、精神分析

学の理論を使った、「オタク論」の中では最も本格的な学術書の一つである。その著書で斎藤はまず、岡田のオタク論に異議を申し立て、それを「オタクエリート」の条件であって、全てのオタクが満たしうる条件とは言えない」とした（斎藤、二〇〇〇・二五）。斎藤によると、オタクの特徴とは、虚構のコンテクストに親和性が高い、愛の対象を所有するために「虚構化」という手段に訴える、「多重見当識」を生きる、虚構それ自体に性的対象を見い出すことができる、の四つである。つまり、オタクは「エリート鑑賞者」ではなく「虚構への独特なスタンスを持つ者」として規定されている。

斎藤とラカンの精神分析理論は複雑なので、ここではその詳細には立ち入らない。筆者が注目したいのは、斎藤のオタク論が「オタク的アイデンティティ」に新しい要素を導入することにより、新しいデイスタンクシオンまたは救済コードを提供したということである。岡田のオタク論がオタクを文化のリーダーとして持ち上げ、ポジティブな意味を与えたと同時に、敷居を設置することにより「エリートでないオタク」を差別するような言説を可能にしている。そこで、「オタク」という集団の外部と内部、その両方から差別されかねない状況に対して、彼らは救済を求めなければならなかった。「オタク」という価値のあるアイデンティティを奪還しなければならなかった。それを可能にし

たのが、他ならない斎藤の理論であった。

斎藤は、虚構により喚起された性的欲望、即ち「萌え」を以下のように説明した。「虚構空間において自律的な欲望の対象を成立させること。まさにそこがオタクの究極の夢ではなかったか。現実の性的対象の代替物にすぎない虚構などではなく、現実という担保を必要としない虚構を作り出すこと。虚構が自律的なりアリティを獲得するためには、虚構それ自体が欲望される必要がある」（斎藤、二〇〇〇・二四八）。この精神分析学の視点が、様々なセクシュアリティに関連するオタク論を可能にしている。岡田のようにオタク論に新しいディスタンスを導入することも、「オタクが性的犯罪者の予備軍」という偏見に対しても、そしてオタクを「恋愛ヒエラルキーの最下位」や「結婚難民」として嘲笑う類の言説に対しても斎藤の視点から反論することができる。このようなアイデンティティの戦略は、オタク論の全体的な流れを変え、やがて「オタクの死」という事態を招くことになった。

最後に、この時代の新聞記事を見てみよう。まずは、「オタク文化」の海外での反応に関する記事が相変わらず多かった。これは前の時代から既に存在した流れである。次に、オタク論者に関する記事が激増していた。特に岡田に関する記事の多さは、岡田とオタクがその時代での強い存在感を示していたことを明らかにしている。そして最後に、

オタクという言葉の広義化が進んでいた。岡田の努力により、「オタク」という言葉が有名になり、それに伴い「健康オタク」や「オタクファン」などの従来には見られなかった表現も次々と生産された。ちなみに、オタクを批判する記事が一気に増えたということも確認できる。オタクに関する記事が全般的に増えたことが原因であろう。

三一四 「平凡的なオタク」の時代

ここに至って、「オタク論」は既に頂点に達した。残されたものは「死」あるのみ。この時代を代表するオタク論は、『オタクはすでに死んでいる』しかない。

まずは『電車男』を思い出して頂きたい。この作品が一時的にブームになって、「オタク論」はもう一度盛り上がりを見せていた。岡田曰く「世は既にオタクの春」。このような環境の中で、岡田に洗脳され、「自分はオタクだ」と思い込んでいる人が日々増えていく。だが明らかに、そのような人達は岡田の言うオタク、即ち「情報資本主義をリードする情報強者」ではあり得ない。さもないと洗脳されることもなからう。斎藤はこのような事態に対して、「オタクを自認するためにはオタクを逸脱しなければならぬ。この自認が逸脱に繋がるところにオタクの定義が困難である一つの原因があるのではないだろうか」と述べていた。まさに「オタクのパラドックス」である。『オタク

はすでに死んでいる」という書籍は、「オタク論」の終結を象徴する「オタク論」に他ならない。

既に見てきたように、オタク論は基本的に互いに矛盾し合うものである。『オタクはすでに死んでいる』では、岡田が斎藤の異議に対して、「もしも斎藤氏が言うように二次元に萌えるのがオタクだとすれば、私を含めてかなりの数のオタクはオタクではないことになる」と反論した。ところが現実には、「（萌えに）興味が無いと言うと、ネットでは批判や攻撃の対象になる」、そして「あいつは本当のオタクじゃない、と揚げ足を取るようにネットに書き込む人がある」などという事態が起こった。それに対して岡田は「オタクの定義、いつの間にそんなに排他的になってしまったのであろうか」（岡田、二〇〇八・二九）と苦言したが、彼こそがそのような事態を招いた張本人である。

『電車男』や『らき☆すた』などの作品の影響で、オタクになるための敷居がどんどん撤去されていく。だから岡田は「オタクは死んだ」と言わざるを得なかった。原・新人類と原・オタクのリーダーのように、岡田は「オタク」から撤退したのである。『オタク学入門』では、岡田が「オタクになるためには、天文学的な経済的、時間的、知性的投資を必要とする」（岡田、一九九六・五一）と述べていたが、そのようなオタク的なデイスタंकシオンはもはや不可能になった。パベルの塔が崩壊したように、「オタク」

という共通感覚が崩壊し、エリートオタクが撤退し、「オタク」がその下位概念にあたる（各分野の）「マニア」に乗っ取られたのである。そこには一つの「逆選抜」のプロセスが始まった。二〇〇七年のアニメ作品『らき☆すた』では、「オタク買い」という概念が宣伝された。それは、使い分けをするため、特典をコンプリートするため、またはイベントの抽選券、応募券を大量に入手するためなどの理由で、同じ商品を複数のショップにまたがり大量に購入する事を指す。このような販売戦略に振り回されている消費者の姿は、岡田の言うオタクとは全く対極にあるものと言えよう。だがそれが「オタク買い」として認識されている。指摘するまでもなく、このような転倒は逆選抜の結果そのものである。騙されやすい消費者を「オタク」に仕立てるというコンテンツ産業の「戦略」が功を奏しているに違いない。これが今の現実である。

その他に、野村総合研究所オタク市場予測チームの『オタク市場の研究』、榎本秋の『オタクのことが面白いほどわかる本』などのオタク論も存在する。タイトルを見れば分かると思うが、これらは殆ど経済や産業に関する書物で、オタクそのものに対する言及が少ない。特に注目すべきのは、榎本がオタクを一〇種類に分類したことである。アニメオタク、インターネットオタク、ゲームオタク、マンガオタク、パソコンオタク、読書オタク、フィギュアオタク、

芸能人オタク、特撮オタク、コスプレオタク、の一〇種類である。「オタクの死」というのは、まさにこのことである。

その影響で、オタクに関するマイナ斯的な記事が目立つほど増えていた。オタクを犯罪者として批判する記事はさおき、オタクが犯罪者に狙われるという旨の記事も少なからず存在する。更に、オタクがもう一度格差に晒されたという流れも見られる。やはり、オタクのイメージが良くなくなったとは言えない。一方、もう一つの流れも顕著化している。それは商店街や「聖地」の宣伝、即ちオタクを金蔓とする戦略の表れである。今日では、オタクは「オタク買いをする消費者」、そして「観光しに来る客」として持ち上げられている。「犯罪者に狙われやすい弱者」といい、「訓練された消費者」といい、そのようなイメージは「ステイグマ」よりも無価値な存在なのかもしれない。森川の予言が現実となった。オタクに死なれては困る、それが今の業界である。

四 おわりに

オタクについて、東は以下のように述べていた。「オタクたちが社会的現実よりも虚構を選ぶのは、その両者の区別がなくなっているからではなく、社会的現実が与えてくれる価値規範と虚構が与えてくれる価値規範の間のど

ちらが彼らの人間関係にとって有効なのか、その有効性が天秤にかけられた結果である。オタクたちが趣味の共同体に閉じこもるのは、彼らが社会性を拒否しているからではなく、むしろ、社会的な価値規範がうまく機能せず、別の価値規範を作り上げる必要に迫られているからなのだ」(東、二〇〇一、四二―四四)。単一の大きな社会的規範が有効性を失い、無数の小さな規範の林立に取って替わられるというその過程が、まさにジャン・フランソワ・リオターが指摘した「大きな物語の凋落」、いわゆる「ポストモダン」的な現象である。東のこの著書が書かれた時代、「オタク」はまだ「小さい大きな物語」として機能していたが、今日では、それさえも粉々になったということは明らかである。こう考えると、やはり「オタクの死」はフーコーの言った「人間の死」の延長線の上にあるものではないか。では、この「ポストオタク時代」を、オタクはどう生き抜くのか。それについて考えることは、「オタクの系譜学」の次なる課題となろう。

註

- (1) フーコーの著作以外には中山（一九九六）やオーウェン（二〇〇二）などを参照。
- (2) 新明解国語辞典（第七版）による定義を参照。
- (3) 「家族的な類似性」についてはウイトゲンシュタイン（一九七六）を参照。
- (4) 「否定神学」については東（一九九八）を参照。
- (5) <http://www.netcity.or.jp/OTAKU/okada/library/single/GENDAI.html>（最終チェック日時：二〇一三年九月二〇日）を参照。
- (6) 「おたく」の精神史——一九八〇年代論』の朝日文庫版の著者コメントを参照。

参考文献

- 東浩紀、一九九八、『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて』、新潮社
- 東浩紀、二〇〇一、『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』、講談社
- ウイトゲンシュタイン・L、一九七六、『哲学探究——ウイトゲンシュタイン全集（八）』（藤本隆志訳、大修館書店）
- 榎本秋、二〇〇九、『オタクのことが面白いほどわかる本』、中経出版
- 大塚英志、二〇〇四、『おたく』の精神史——一九八〇年代論』、講談社
- オーウェン・D、二〇〇二、『成熟と近代——ニーチェ、ウエーバー、フーコーの系譜学』（宮原浩二郎・名部圭一訳、新曜社）
- 岡田斗司夫、一九九六、『オタク学入門』、太田出版

- 岡田斗司夫、二〇〇八、『オタクはすでに死んでいる』、新潮社
- 斎藤環、二〇〇〇、『戦間美少女の精神分析』、太田出版
- 中島梓、一九九五、『コミュニケーション不全症候群』、筑摩書房
- 中山元、一九九六、『フーコー入門』、筑摩書房
- 野村総合研究所オタク市場予測チーム、二〇〇五、『オタク市場の研究』、東洋経済新報社
- フーコー・M、一九七四、『言葉と物——人文科学の考古学』（渡辺一民・佐々木明訳）、新潮社
- フーコー・M、一九七七、『監獄の誕生——監視と処罰』（田村俣訳）、新潮社
- フーコー・M、一九八六a、『知への意志——性の歴史（一）』（渡辺守章訳）、新潮社
- フーコー・M、一九八六b、『快楽の活用——性の歴史（二）』（田村俣訳）、新潮社
- フーコー・M、二〇一二、『知の考古学』（慎改康之訳）、河出書房新社
- 宮台真司、一九九四、『制服少女たちの選択』、講談社
- 森川嘉一郎、二〇〇三、『趣都の誕生——萌える都市アキハバラ』、幻冬舎
- リオターール・J・F、一九八九、『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』（小林康夫訳、水声社）